

大曲駅西口周辺地区整備基本構想

令和8年3月

大 仙 市

東日本旅客鉄道株式会社秋田支社

大曲商工会議所

目 次

ページ

1. 基本構想の背景と目的

(1)はじめに	1
(2)構想の位置づけ(上位・関連計画等)	1
(3)本構想の役割	2

2. 大曲駅西口の現状と課題

(1)大曲駅西口の現状	3
(2)大曲駅の利用状況	3
(3)対象区域	4
(4)対象区域の現況	5
(5)都市計画による地域等	6
(6)周辺環境と動線	7
(7)現状と課題	8

3. 整備の基本理念と方向性

(1)検討の経緯と実証事業の成果	9
(2)市民等のニーズ	11
(3)基本理念と方向性	12

4. 整備計画

(1)基本コンセプトとターゲット	13
(2)整備に向けた基本方針	14
(3)整備案の比較検討	15

5. 事業推進のための検討体制

(1)検討組織の構築	19
(2)ステークホルダーとの連携	19

6. 今後のスケジュールと進め方

	20
--	----

1. 基本構想の背景と目的

(1) はじめに

大仙市は、秋田県の内陸南部に位置し、古くから県南地域の交通・物流の要衝として発展してきました。日本最高峰の権威を誇る全国花火競技大会「大曲の花火」をはじめとする豊かな観光資源と、四季折々の美しい自然が調和する田園交流都市です。

その中心拠点である大曲駅は、秋田新幹線と奥羽本線・田沢湖線が交差する県内有数の結節点であり、首都圏から日帰り圏内という高い利便性を有し、通勤・通学はもとより、広域的なビジネスや観光の起点として大仙市の持続的な発展を支える極めて重要な役割を担っています。

一方で、近年の社会情勢の変化に伴う若年層の流出や少子高齢化は、中心市街地の活力低下を招く深刻な要因となっています。また、価値観の多様化やライフスタイルの変容に伴い、駅周辺空間には単なる通過点としての機能にとどまらず、「まちの顔」にふさわしい都市機能の充実や、人々の交流を育む滞在機能など、新たな役割が求められています。

こうした背景から、今般、大仙市、東日本旅客鉄道株式会社秋田支社（以下、「JR東日本秋田支社」という。）、大曲商工会議所の3者（以下、「3者」という。）が連携・協力し、大曲駅西口周辺の魅力や利便性の向上を図り、交流人口の拡大や賑わいの創出に寄与することを目的とした「大曲駅西口周辺地区整備基本構想」を策定しました。今後は本構想に基づき、官民が連携し、基本計画の策定や基本・実施設計、関係機関との協議等を通じて、整備に向けた具現化を進めていきます。

(2) 構想の位置づけ(上位・関連計画等)

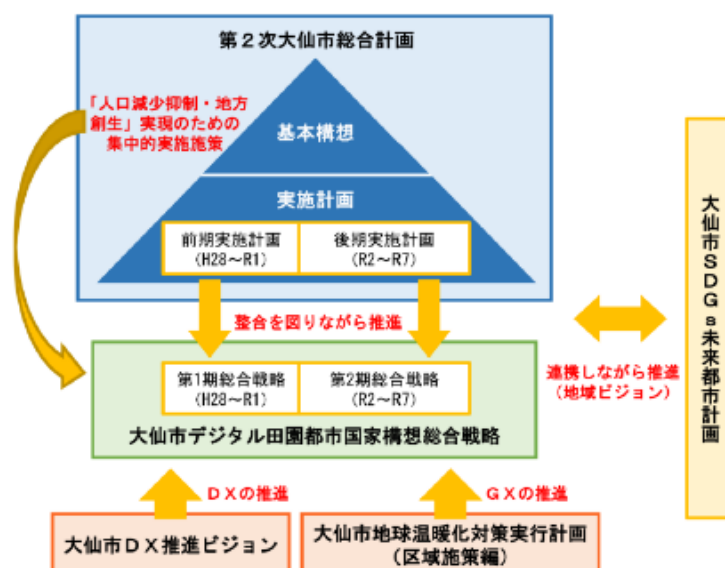
上位・関連計画における本構想の位置づけは以下のとおりです。

①第2次大仙市総合計画

大仙市の将来都市像「人が活き 人が集う 夢のある田園交流都市」の実現に向け、中心市街地の活性化を牽引する魅力ある拠点形成を目指します。本構想では、施策の柱「市街地の整備」を具現化するため、官民連携による具体的な整備方針を定めます。

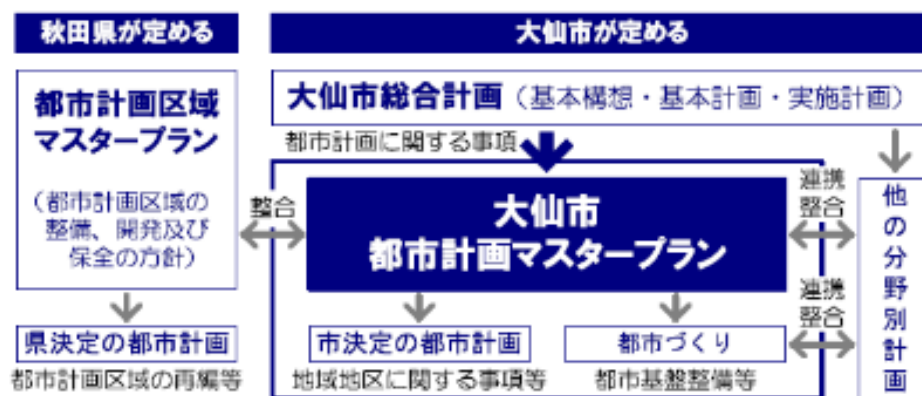
②大仙市デジタル田園都市国家構想総合戦略

総合戦略の「機能集約型都市構造への転換推進」に寄与すべく、持続可能な都市基盤としての駅前空間のあり方を提示します。また、人口減少抑制と地方創生の実現に資する、実効性の高い拠点整備を推進します。



③大仙市都市計画マスタープラン

本プランの重点施策「都市構造の再編と中心市街地活性化」の実現に向け、「中核拠点」である大曲駅西口周辺の整備方針やゾーニング等を整理し、駅周辺の利便性の向上と賑わいを創出し、街なか全体の価値向上を図る基本構想として策定します。



(3)本構想の役割

本構想は、前項に掲げた上位・関連計画に即した部門別計画として位置づけるとともに、3者が合意した共通のビジョンとしての役割を担います。

具体的には、大曲駅西口周辺における整備の必要性や基本方針、具体的なゾーニング案等を体系的に整理することで、次段階において実施する基本設計および実施設計のほか、官民連携事業の推進や関係機関との協議における「基礎的な指針」として活用することを目的に策定するものです。

2. 大曲駅西口の現状と課題

(1) 大曲駅西口の現状

大曲駅西口周辺は、平成18年から平成22年までの5ヵ年にわたる「大仙市都市再生整備計画」の対象地域(計画面積 100ha)内に位置しており、高い利便性を有し、中心市街地の賑わいを再生する上でも重要な拠点とされています。

同計画では駅西地区の課題として「狭隘道路の散在による安全性の懸念」や「商店街の活力低下」が指摘されており、これに対し、事業目標(目標1)として「魅力ある街並み形成により中心市街地の賑わい再生を図る」ことが示されています。

しかし、同計画の終了から約15年が経過した現在においても、本対象区域は「魅力ある街並み形成」の起点となるべき好立地にありながら、駐車場や駐輪場、交番が点在するのみに留まっています。駅前の「まちの顔」にふさわしい、土地のポテンシャルを最大限に活かした有効活用が十分にされていない低利用な状況が続いています。

(2) 大曲駅の利用状況

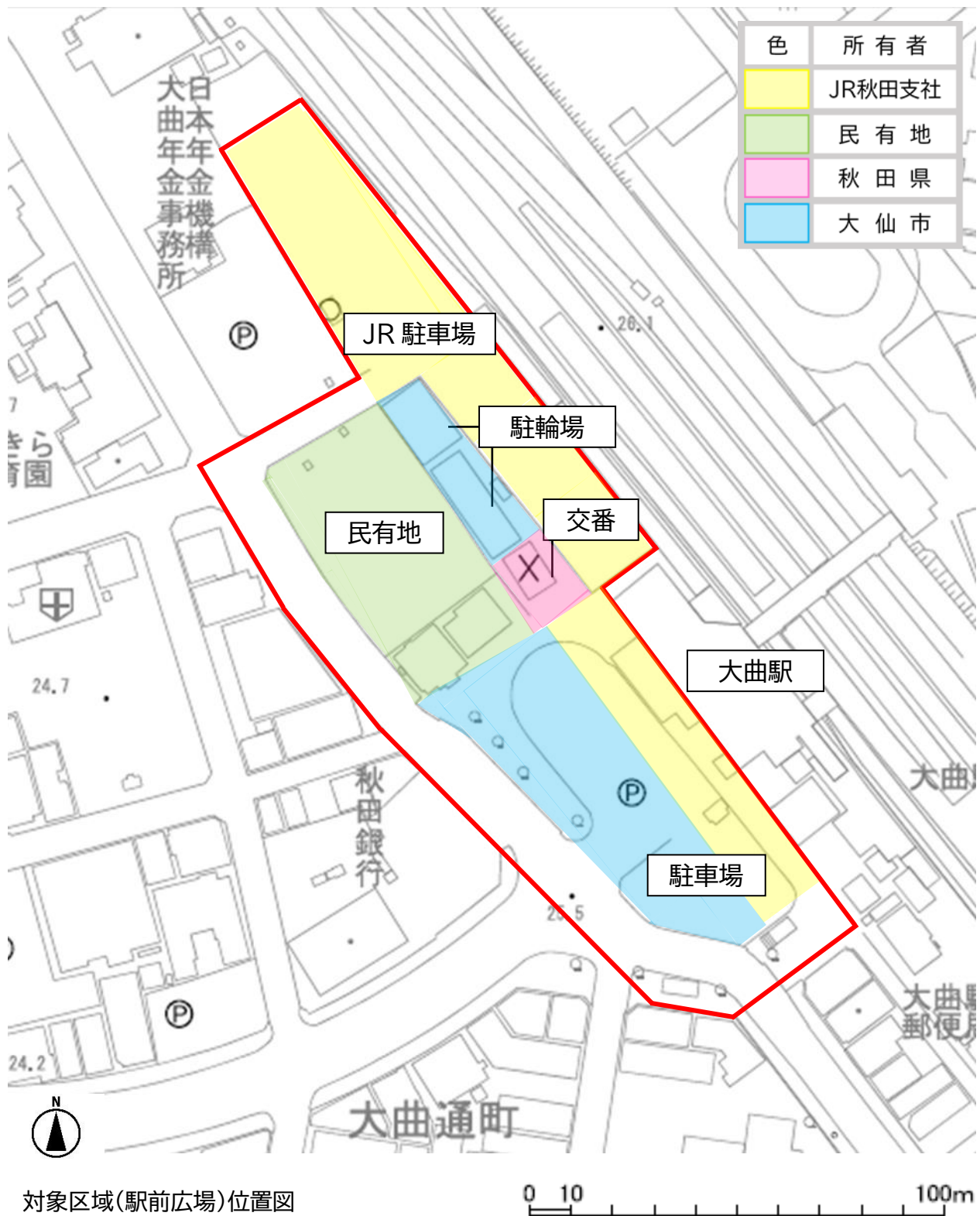
大曲駅の1日平均乗車人員(JR東日本発表)は、平成30年度の2,043人に対し、令和6年度には1,965人とコロナ禍前の状況に回復しつつあります。これは秋田駅に次ぐ県内第2位の乗車数であり、大仙市における大曲駅の拠点性は極めて高い状況にあります。

利用内訳では、利用者の約5割を定期利用者が占めており、その大部分は通学利用の高校生であると推察されます。このことから、駅前の日常的な賑わい創出にあたっては、将来を担う「学生」を主要なボリューム層として捉える必要があります。

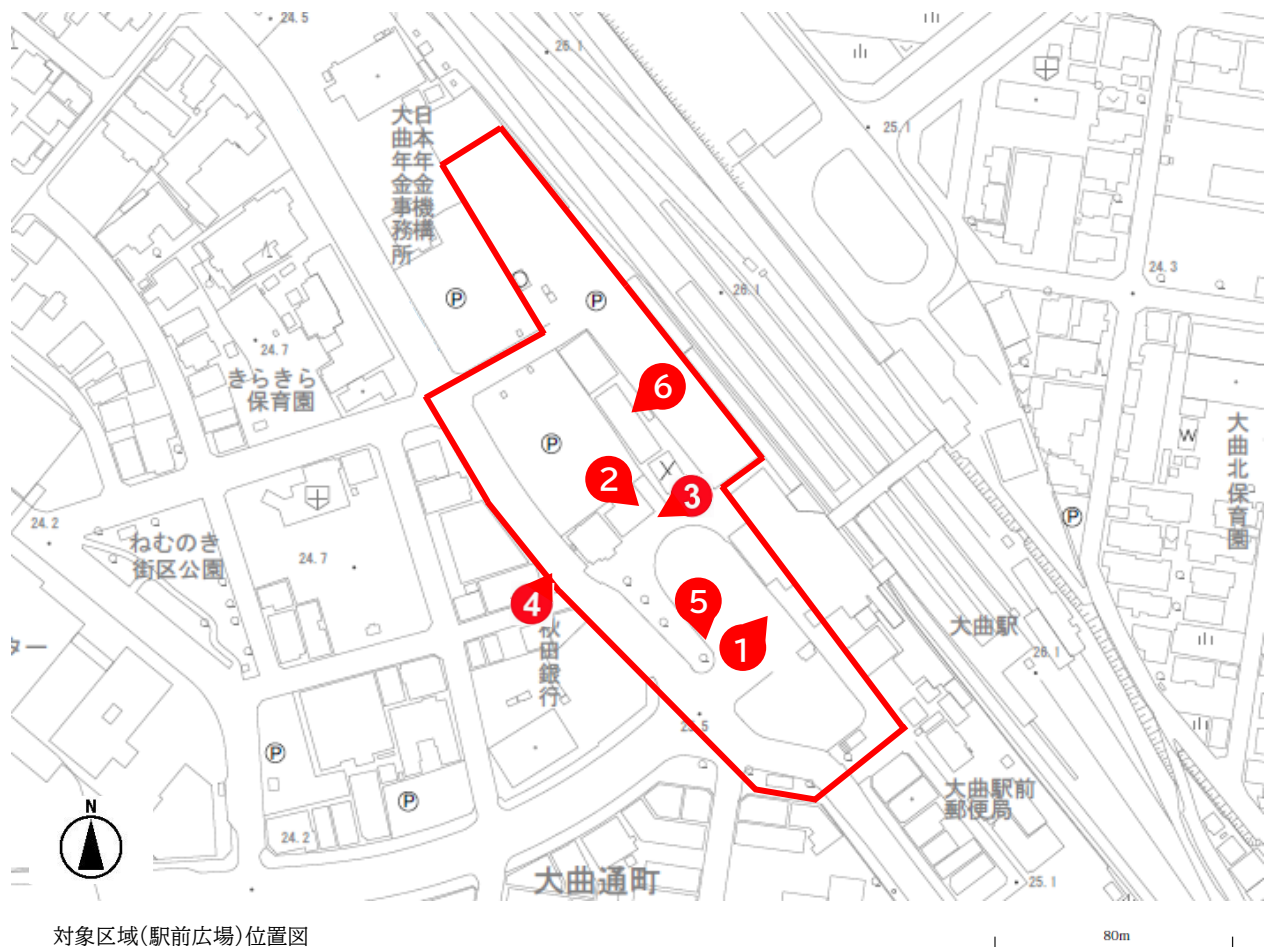
同時に、定期外利用者(来訪者)や周辺施設利用者など、多様な属性の人々を惹きつける空間整備を行うことが、駅周辺の持続的な活力と「まちの顔」としての機能強化に繋がると考えます。

(3)対象区域

本構想の対象区域は、駅前に求められる都市機能の充実および利便性の向上を図るため、大曲駅西口に隣接する駐車場、駐輪場、交番、駅前ロータリー、および周辺道路を含む一体的なエリア(図中赤枠の範囲)とします。



(4)対象区域の現況



①JR 大曲駅



②駅前ロータリー



③駅前遊歩道



④民有地

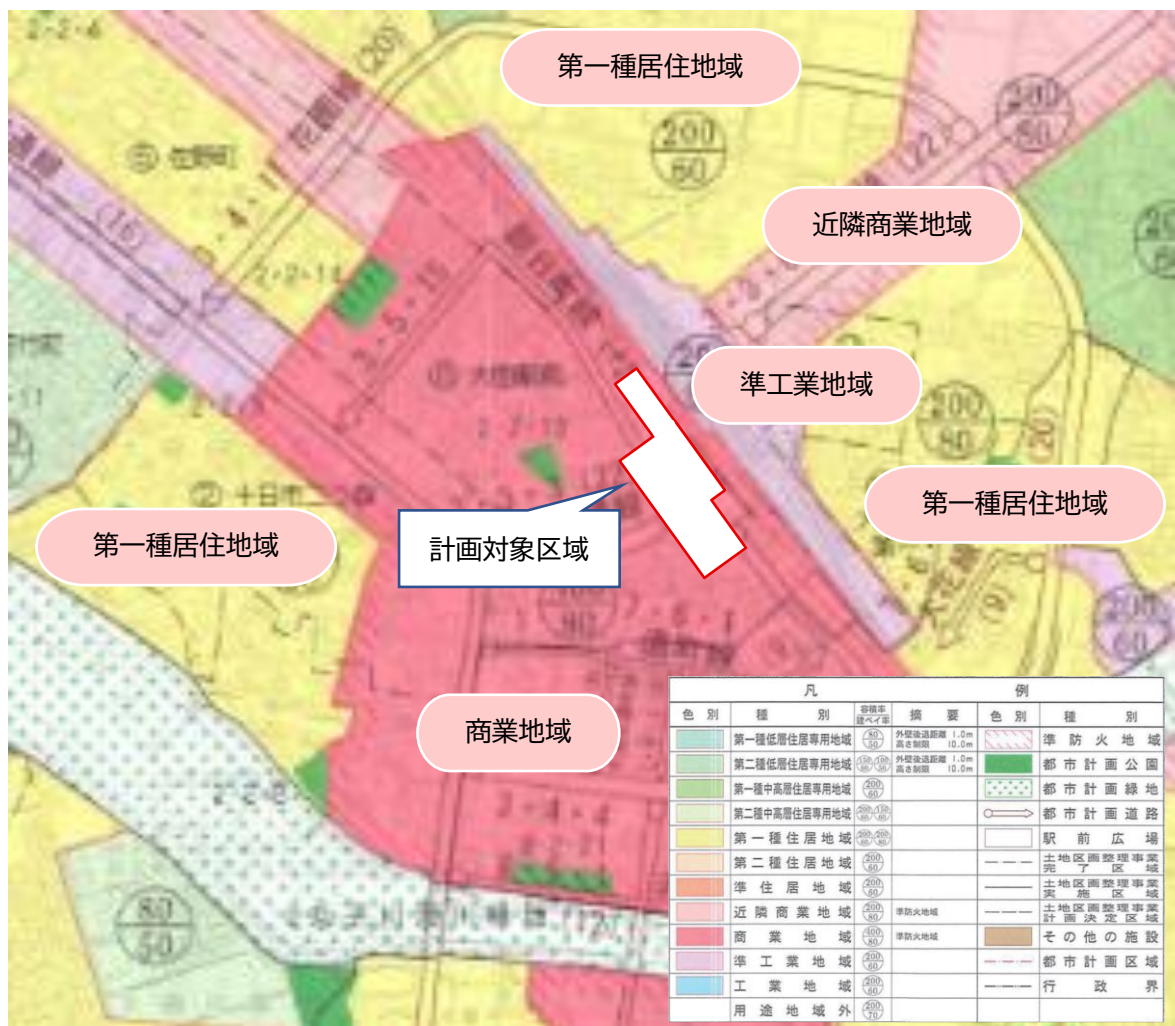


⑤交差点(商店街入口)



⑥駐輪場

(5)都市計画による地域等

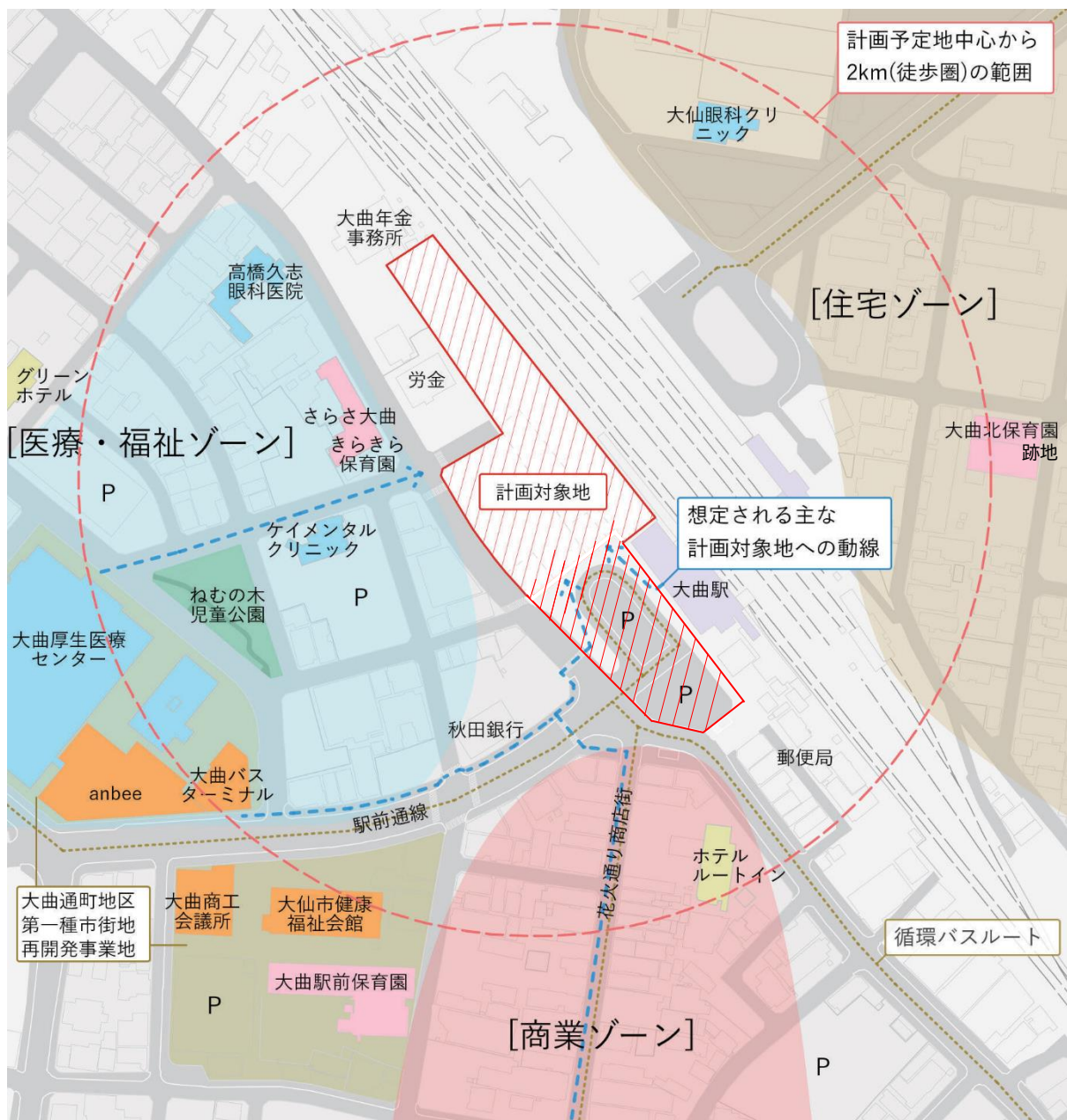


(6) 周辺環境と動線

本対象区域は、大曲通町地区第一種市街地再開発事業により整備された大曲厚生医療センター等の「医療・福祉ゾーン」と、中心商店街が形成する「商業ゾーン」に隣接しています。また、駅東側の住宅街からもアクセスが良く、多様な都市機能に囲まれた高いポテンシャルを有しています。

交通面では、駅前ロータリーに市循環バスの停留所やタクシー乗り場が集約されるなど、高い利便性を備えています。特に通学で鉄道やバスを利用する多くの学生にとって、駅周辺は待ち合わせや休憩を伴う日常的な活動拠点となっている実態があります。

一方で景観面においては、近隣の「ねむのき児童公園」を除き、緑に親しめる公共空間や、歩行者がゆったりと滞在できるスペースが不足しています。このため、優れた交通・都市機能の利点を活かしつつ、日常的な憩いや散策、多様な交流を可能にする「人中心」の滞在空間の創出が求められています。



(7)現状と課題

これまでの現状分析に基づき、本対象区域における課題を以下のとおり整理します。

① 土地利用の低・未利用化

大曲駅西口周辺が長年駐車場や駐輪場としての利用に留まっており、「まちの顔」にふさわしい都市機能の充実や、土地の有効活用が十分になされていない。

② 観光資源を活かした滞在型観光の推進

大仙市は、「大曲の花火」をはじめとした行祭事、史跡・文化財、豊かな食文化・地酒など特色ある観光資源を有しているが、周遊観光や通年観光に結びついておらず、長く滞在し観光してもらう仕組みづくりが必要である。

③ 日常的な賑わいと交流の不足

花火大会等のイベント期を除き、駅前空間の日常的な活気が低下しており、人々が気軽に集い、憩える空間が不足している。

④ 歩行者動線の回遊性と安全性

駅前広場における歩行者と車両の動線錯綜に加え、駅から中心商店街や周辺医療機関へ繋がる歩行者動線が不明瞭であり、歩行者の利便性と安全性の向上が求められている。

⑤ 駐輪場の老朽化と歩車分離

既存駐輪場の老朽化に加え、歩行者と自転車の動線分離が不十分なため、安全な歩車分離と駐輪機能の再編が急務である。

⑥ 良好な生活環境の形成による生活利便性の向上

駅周辺は住宅が点在する市民の「生活の場」でもあることから、誰もが暮らしやすい環境を整え、生活利便性を高める必要がある。

⑦ 対象区域における合意形成の必要性

対象区域にはJR用地や市有地に加え、複数の民有地が混在しており、本構想の実効性を高めるためには、周辺地権者との調整による合意形成を図ることが不可欠である。

3. 整備の基本理念と方向性

(1) 検討の経緯と実証事業の成果

大曲駅西口周辺の整備にあたっては、これまで官民が一体となり、その利活用方策について検討と実践を積み重ねてきました。

① 検討体制の変遷と本構想の策定

大曲駅西口周辺の利活用については、令和4年度より行政、鉄道事業者、民間企業等の5者による「検討会議」を設置し、協議を重ねてきました。令和6年2月、経済情勢の変化に伴う民間企業の参画辞退により検討会議は解散となりましたが、駅前整備の重要性に鑑み、同年6月より大仙市、JR東日本秋田支社、大曲商工会議所の3者による実務担当者レベルの「勉強会」を組織しました。

勉強会では、将来的なハード整備を見据え、まずはソフト事業による賑わいづくりに先行して取り組み、その実践を通じて得られた知見を共有しながら、並行して整備構想の具体的な協議を重ねてきました。本構想は、この3者による継続的な協議の成果を体系化したものであり、一連の検討過程における「総括」と位置付けるものです。

② 実証事業「Buy Local 大曲」の実施と成果

前述の先行的なソフト事業として、令和7年度に「Buy Local 大曲」を計2回開催しました。本事業は、都市計画家の加藤寛之氏が大阪市阿倍野・昭和町エリアで提唱し、現在全国的な広がりを見せている「Buy Local」(※)の理念を、大仙市の駅前整備における実践的な手法として取り入れたものです。

駅前の遊休地を活用し、駅周辺の24店舗が参画した本事業は、多くの家族連れ等で賑わいを見せ、駅前空間が持つポテンシャルを実証するとともに、市民が駅前への愛着を深める重要な契機となりました。

この実践を通じて構築された地域プレイヤーとの連携体制や、「人中心」の空間利用のノウハウは、本構想におけるゾーニングや動線計画を策定する上での重要な基礎資料となっており、ソフト・ハードが一体となった整備指針の礎を築く成果となりました。

※「Buy Local」とは、「地元で買い物をしよう」という地元での消費を通じて地域経済を活性化させる運動です。地産地消と同様に、市民が地元店舗を利用することで魅力的な個店を支え、地域の魅力や生活の質の向上を目指すものです。



「Buy Local 大曲」のイベント開催時の様子（写真とチラシ）

(2)市民等のニーズ

これまでの実証事業や検討会議での市民アンケート等を通じて寄せられたニーズを以下の5つの視点で整理します。

① 滞在・交流に関するニーズ

- ・目的がなくても気兼ねなくゆっくり過ごせるベンチやスペースが欲しい。
- ・幅広い年代の方々がよく利用する施設を駅前に整備してほしい。
- ・病院で呼ばれるまでの待ち時間などに、何か楽しめたり見たりできるところがほしい。

② 若者・学生の活動に関するニーズ

- ・学校帰りや電車の待ち時間に、友達と集まったり勉強したりできる場所が足りない。
- ・高校生が自由に使える Wi-Fi や電源のあるフリースペースを作してほしい。
- ・雨が降っても遊べる、体を動かせる場所があったらいい。

③ 子育て世代に関するニーズ

- ・天候に左右されず、親子で遊んだり、大人がゆっくりできる室内施設があるといい。
- ・子どもたちが大きな声を出して遊べるような場所が欲しい。

④ 交通・安全・利便性に関するニーズ

- ・駐輪場が古くて使いにくい。通学路に合わせた場所にしてほしい。
- ・車いすやベビーカーでも歩きやすい環境を整えてほしい。
- ・商店街や病院へ行く際、車通りが多くて危ないので、安心して歩ける道にしてほしい。

⑤ 土地活用・機能に関するニーズ

- ・駅前の一等地がずっと空き地のままなのはもったいない。もっと有効に活用してほしい。
- ・遠方からの来訪者が泊まれる施設や、市の魅力を発信する場所が駅前にあるといい。

(3) 基本理念と方向性

これまでの現状分析や市民ニーズ等を踏まえ、大曲駅西口周辺を「車中心」から「人中心」の空間へ転換することを目指すとともに、交通結節機能の強化や低・未利用地の有効活用により、市民の日常と来訪者の活気が交差し、新たな賑わいと交流が持続的に生まれる環境を整えるため、以下の3つを整備の柱に据えます。

① 「まちの顔」にふさわしい都市機能の充実と拠点形成

「まちの顔」にふさわしい都市機能を導入・充実させ、滞在型観光の推進と地域経済の活性化を図ることで、中心商店街と一体となった活気ある拠点形成を目指します。

② 日常的な賑わいにあふれ、多様な世代が交流する拠点の創出

多世代の市民が日常的に集い、憩える空間を創出するとともに、若者や市民による新たな活動・挑戦を育むことで、地域の愛着と活力を高める交流拠点を構築します。

③ 安全性と回遊性を高める「人中心」の基盤づくり

駅周辺の交通環境を再編し、誰もが安全・快適に移動できる歩行者優先の空間を整備することで、周辺施設や商店街とのつながりを強化し、街なか全体の回遊性を向上させます。

4. 整備計画

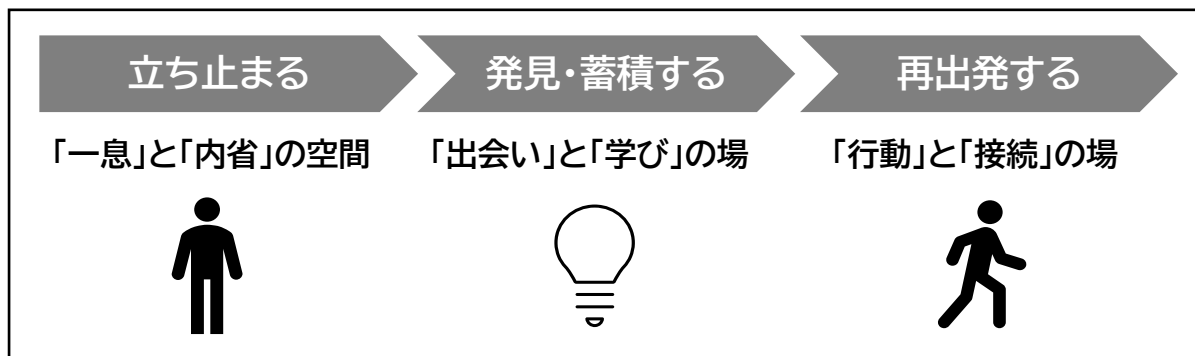
(1) 基本コンセプトとターゲット

① 基本コンセプト

大曲駅の「立ち止まる必然性」を「人生・ビジネスの転換点」に昇華
～ Switch-Back & Nexus ～

大曲駅は、新幹線の停車駅で唯一の「スイッチバック」を行う駅であり、古くから県南の窓口、交通の要衝としての役割を担ってきました。本構想では、この特性を単なる「進行方向の変更」ととどめず「次に進むための準備」とポジティブに再定義します。

移動の過程で必ず立ち止まるこの場所を、生活シーンや人生のステージにおける転換点(Switch-Back)と位置づけ、新たなつながり(Nexus)を創出する空間として、以下の3つのフェーズで展開します。



- ・ 立ち止まる: 多忙な日常の中で「一息」つき、自分を見つめ直す「内省」の空間
- ・ 発見する・蓄積する: 地域文化や新たな知見に触れ、「出会い」と「学び」を得る場
- ・ 再出発する: 次の「行動」へと踏み出し、社会や未来と力強く「接続」する場

② ターゲット(体験者)

地域住民(地域内)と来訪者(地域外)が、それぞれの文脈で「スイッチバック」を体験し、活力が循環する拠点を目指します。

【地域内: 日常の質の向上とシビックプライドの醸成】

- ・ 学生: 学習や友人との交流に加え、地域文化に触れるイベントを通じて、将来の夢や目標を広げ、郷土への愛着を育む。
- ・ 子育て世代: 親子向けサロンや家族交流を通じて、育児の安心感を得るとともに、地域コミュニティへ主体的に関わるきっかけを創出する。
- ・ 高齢者: 健康増進や趣味の活動、多世代交流を通じて、社会とのつながりを維持し、いきいきと活動できる場を提供する。

【地域外：交流人口の拡大と関係人口への進化】

- ・ 観光客：乗り換えや滞在の合間に伝統文化や地域の魅力に深く触れることで、ファン（関係人口）としての再訪や SNS 等での発信を促す。
- ・ ビジネス層：ワークスペースでの活動や地元プレーヤーとの交流を通じ、新たなビジネスの可能性を見出す。
- ・ リトリート客：街並みや自然に身を置き、自分との対話を通じて、将来の方向性を整理・決定する機会を提供する。

これらの多様なターゲットが交差し、休息と発見を経て未来へと再出発できる空間を創出することで、持続的な賑わいと「生活街」としての活力を生み出します。



「学生」



「子育て世代」



「観光客」

(2)整備に向けた基本方針

本構想の実現に向けて、駅前空間を以下の3つのゾーンに区分し、一体的な整備を図ります。

【都市機能ゾーン】 駅前の低・未利用地を最大限に活用し、宿泊施設や商業等の都市機能を充実させることで、地域内外からの新たな人流を創出するとともに、中心商店街との連続性を強化することで、地域経済を牽引する市の玄関口にふさわしい拠点を形成します。

【交流・滞在ゾーン】 若者や市民の新たな活動や挑戦を後押しする場を整え、多様な活動が連鎖する環境を構築するとともに、市民の「生活の場」としての利便性を高め、子どもから高齢者まで多世代が日常的に気兼ねなく休憩し、交流できる滞在空間を創出します。

【交通・回遊ゾーン】 駐輪場の再編や交差点改良を軸に、歩行者と車両の動線を明確に分離した「人中心」の基盤を整備するとともに、駅から中心商店街や周辺医療機関等へと繋がる安全性と快適性を備えた「ウォーカブル（歩きたくなる）な動線」を構築することで、街なかへの人の流れを生み出します。

(3)整備案の比較検討

大曲駅西口周辺開発では、物理的なスイッチバック駅の特性を活かし、立ち止まる場所を「次への準備」と捉えるコンセプト「Switch-Back & Nexus」を具現化するため、以下の2つの開発手法を想定します。

A案:スモールグリッド開発

本案は、多様な用途のエリアを「グリッド単位」で定義し、ソフト(活用)主体で段階的に開発を進める手法です。

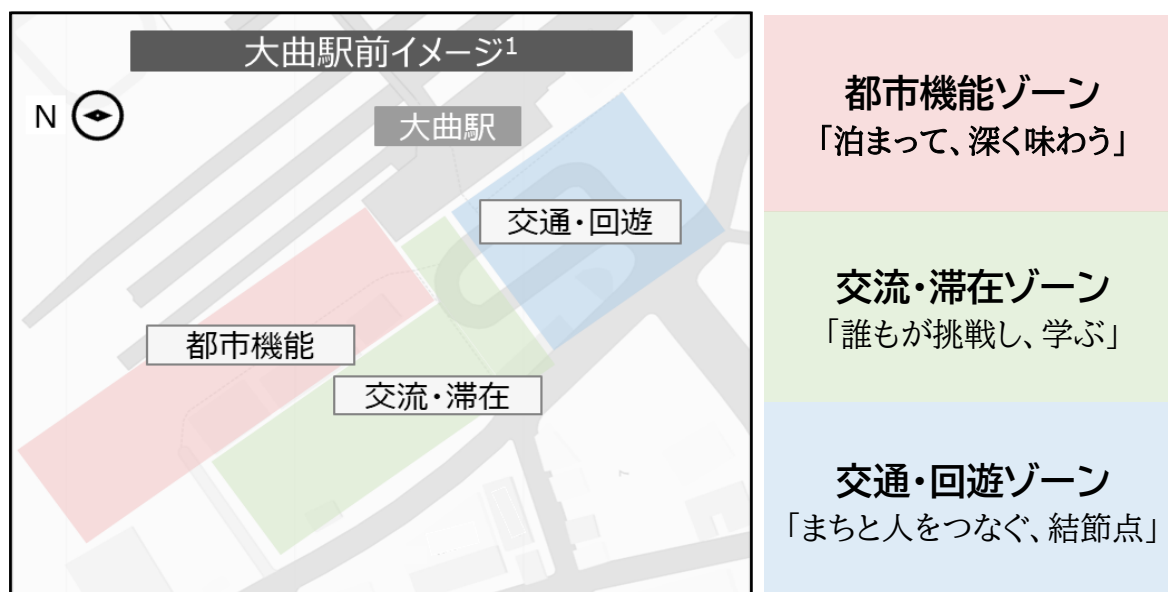
○特徴とアプローチ

「何を作るか」ではなく「どう使うか」に主眼を置いた、ソフト主体のスモールスタートな開発を実施します。エリアをグリッド分けし、多様な目的を持つ人々が自然と集い、活動できるプラットフォームを構築します。



福山市の「福山中央公園」エリア開発

○主な構成要素



・都市機能ゾーン：コンテナユニット等を活用した簡易設置型の宿泊施設のほか、高校生やビジネス客が待ち時間に利用できる、通信環境の整ったフリースペースなど公共・商業機能を備えた施設を整備し、初期投資を抑制しつつ滞在・交流人口の拡大を図ります。また、有事の際には、これらを避難所等の防災拠点として多目的に活用することも想定しています。

・交流・滞在ゾーン：新規創業を志すプレイヤーが試験的に出店できるコンテナショップや柔軟な活用が可能なイベント広場を整備し、多世代が自然と集い、憩える空間を構築します。また、「Buy Local 大曲」の取り組みを深化させ、定期的なマーケットの開催等を通じて、地産地消と地域経済の循環を促進する持続可能な交流拠点を形成します。

・交通・回遊ゾーン：駅前ロータリーの再編により公共交通の動線を最適化するとともに、商店街や医療機関等へ繋がる「ウォーカブルな街並み」を形成します。あわせて、駐輪場を高校への通学動線に近い南側へ移設することで歩車分離を徹底し、スクランブル交差点の導入等とともに、高度な安全性と良好な景観を兼ね備えた「生活街」の基盤を創出します。

○運営・収益モデル

エリア全体を一つのプラットフォームと捉え、出店者（サービサー）からの使用料や出店料を収益の柱とします。また、地権者単位での部分的な開発が可能なため、エリア全体の合意形成を待たずに段階的な事業開始が可能です。

B 案:シンボリック開発

地域のシンボルとなる中大規模の複合施設を建設し、土地の高度利用による価値の最大化と確実な収益化を目指す手法です。

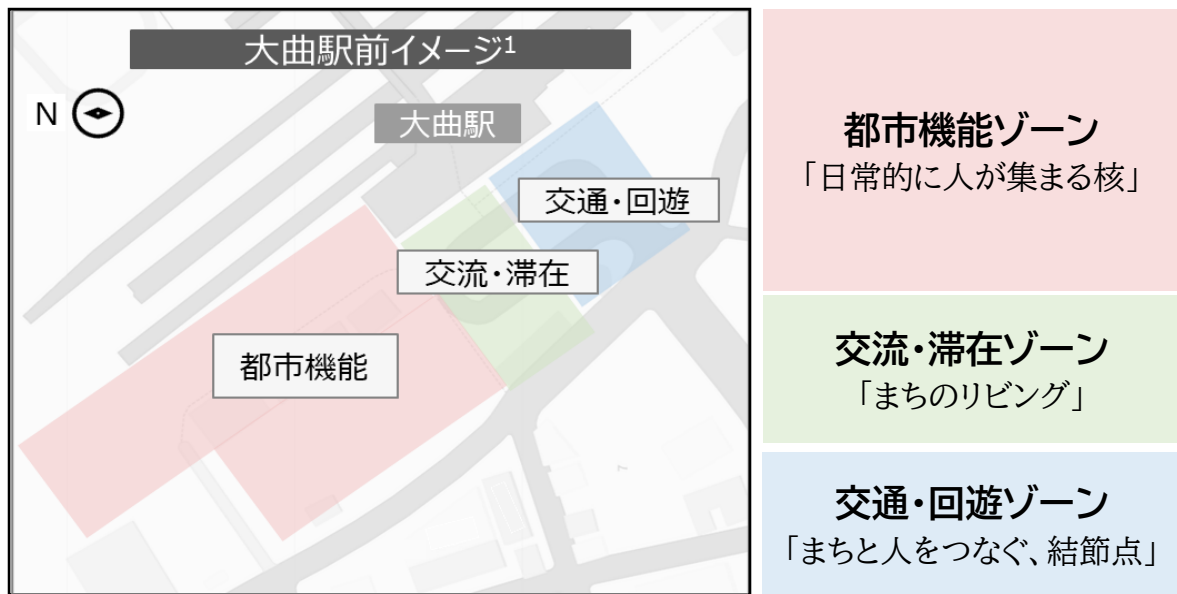
○特徴とアプローチ

商業性と公共性を両立させた施設を定義し、地域内外両面にアプローチします。確実な収益シミュレーションに基づき、高リターンを目指す投資的开发を行います。



北州市「新函館北斗駅前ビル」

○主な構成要素



- ・ **都市機能ゾーン**：低層階に賑わいを生む飲食店や交流イベントブース、中層階にコワーキングスペースや行政サービス窓口、高層階にホテルを配置するなど、多機能を一体的に集約したランドマークビルを建設します。
- ・ **交流・滞在ゾーン**：高質な舗装や融雪設備、人工芝、可動式ベンチなどを備え、高校生やビジネス客が日常的に憩える開放的な空間を整備します。また、「大曲の花火」開催時の大規模な人流コントロールや待機スペースとしても機能させます。
- ・ **交通・回遊ゾーン**：駅前交通を全面的に再編し、駅から商店街や周辺医療機関へのアクセスを最適化します。歩行者中心の街並みを構築することで、広域からの来訪者を街なかへと誘う回遊の起点とします。

○運営・収益モデル

施設に入居する各テナントからの賃料収入を主軸とする、一般的な再開発ビル型の収益モデルです。事業規模が大きく、公共性も期待できますが、多額の初期投資が必要であり、関係する地権者の合意形成が不可欠です。

■主要項目の比較評価

両案の比較における主要な評価項目は以下の通りです。

比較項目	A案:スモールグリッド開発	B案:シンボリック開発
初期投資	比較的少額、段階的な投資が可能	初期に大規模な投資が必要
地権者合意	所有区画別の開発が可能のため、全員の合意を待たずに開始できる	敷地全体を跨ぐため、全地権者の合意形成が不可欠(難易度高)
収益性	個々の収益規模は小さいが、多様な出店により収益拡大を見込む	事業全体の収益規模は大きいですが、空室リスクなど不安定さを伴う
地域参画	市民が「1 坪からの挑戦」などで能動的に参画しやすい	施設主導の開発となり、個人の活動は見えにくい
柔軟性	時代の変化や多様なニーズに合わせ、機能転換や更新が容易	テナント契約が長期となるため、柔軟な変更は困難

○現状に照らした有望案の選定

比較検討の結果、本区域の現状において最も実現可能性が高く、かつ将来の発展性に寄与するのは、「A案:スモールグリッド開発」であると評価しました。

選定の主な理由は以下の通りです。

- ・ 事業主体者の投資リスク：現段階で大規模な初期投資を担う民間主体の特定が困難な状況において、B案は事業の長期停滞を招くリスクがあります。対してA案は、投資規模を抑制しつつ需要に合わせた柔軟な軌道修正が可能です。
- ・ 地権者合意の段階性：本区域には複数の地権者が存在しており、合意形成が段階的になる見込みであるため、区画ごとに着手可能なA案が適しています。
- ・ 多様なニーズへの対応：多世代が利用する駅前の特性上、固定された大規模機能よりも、時代の変化や多様なニーズに応じて機能を柔軟に入れ替えられる仕組みが求められています。
- ・ 「ヒト」の魅力の最大化：花火大会以外の日常的な賑わいを創出するためには、市民や若者が能動的にチャレンジできる場作りが必要です。こうした活動の蓄積が、市民の愛着(シビックプライド)を育み、独自のブランディングに資すると判断します。

以上のことから、本構想では、A案を基本方針として採用し、投資リスクを最小限に抑えつつ、市民と共に育む段階的な都市整備を推進してまいります。

5. 事業推進のための検討体制

本構想の具現化と事業の着実な推進に向け、行政、鉄道事業者、商工団体、および地域プレイヤーが連携する以下の検討体制を構築します。

(1) 検討組織の構築

事業の根幹となる「基本計画」の策定および合意形成のため、以下のメンバーを中心とした「大曲駅西口周辺地区整備検討会議」(仮称)を設置し、定期的な検討を行います。

○中心メンバー(コアメンバー)

- ・ 大仙市：行政施策としての全体調整、公有地の現物出資を含む利活用検討、都市計画との整合性確認。
- ・ JR東日本秋田支社：鉄道事業者としての知見を活かした企画・開発の推進。
- ・ 大曲商工会議所：地元経済界の立場からの助言、地域プレイヤーや地元事業者の参画支援。

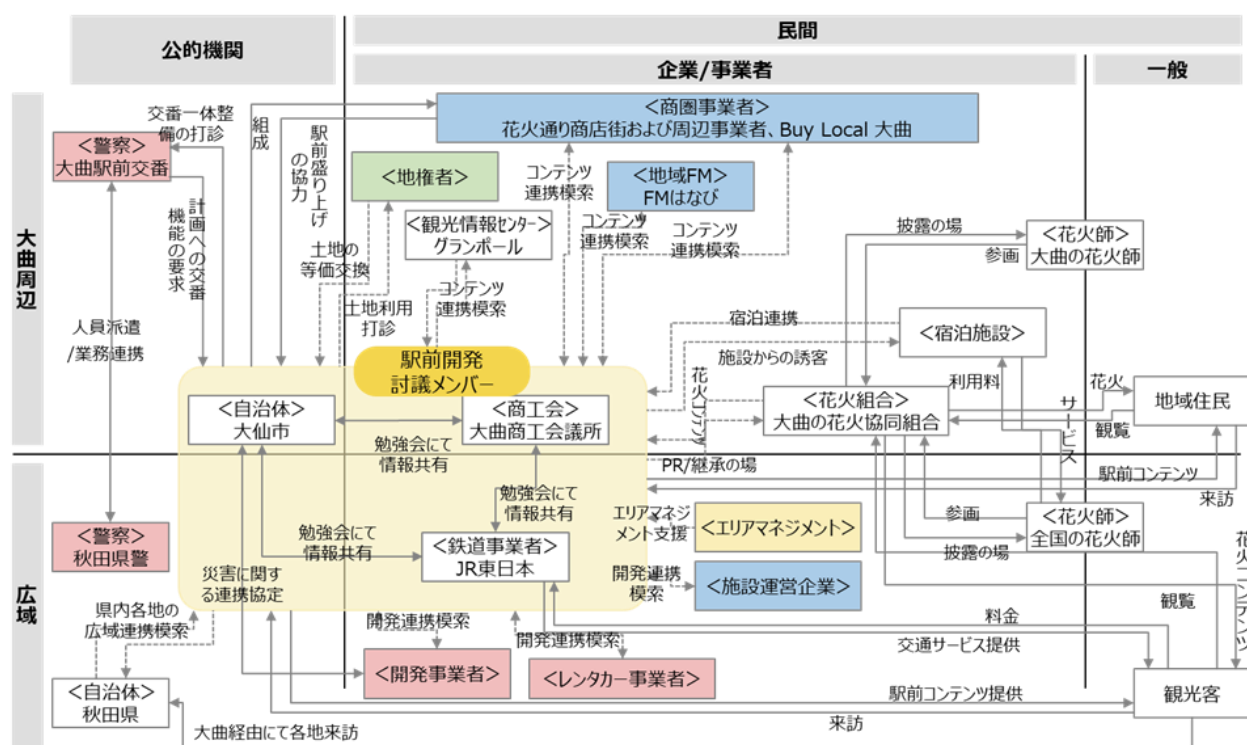
○主な協議事項

- ・ 開発対象区域の定義、整備方針、および計画図の策定。
- ・ 条件整理(公募条件等)と事業手法の選定。
- ・ 概算事業費の算出と想定される財源(補助金・民間資金等)の検討。
- ・ 事業全体のロードマップおよび工程管理。

(2) ステークホルダーとの連携

地域に根差した「生活街」の創出に向け、民間のノウハウや活動を事業に反映させる重層的な連携体制を構築します。

- ・ 開発エリア内事業者：コンテナホテル等の宿泊機能を担う民間企業や商業テナントを担う民間事業者。
- ・ 地域プレイヤー：花火通り商店街、Buy Local 大曲パートナーズ、ナイトマーケット企画、FM はなび等、地域の賑わいを支える各主体。
- ・ 関係公的機関：秋田県(県有地管理)、秋田県警察(交番の移設・広場の治安管理)、大仙市観光物産協会。
- ・ 民間地権者：区域内に土地を保有する地権者との丁寧な対話を重ね、段階的な合意形成を図ります。



大曲駅前開発におけるステークホルダー

6. 今後のスケジュールと進め方

本事業は、地権者合意や関係機関との協議状況を踏まえ、令和8年度より具体的な事業化プロセスへと移行します。「大曲の花火」第100回記念大会(令和10年度)を、整備の進捗を広く発信する重要な機運醸成の節目と位置づけ、令和11年度からの本格着工、その後の段階的な供用開始を目指します。

①合意形成の推進と基本計画の策定(令和8年度)

本構想に基づき、区域内の地権者や駅前交番の移転の協議を進めるとともに、本構想を具現化する「基本計画」を策定します。

- ・ 合意形成の推進：区域内の地権者との合意形成を図るとともに、駐輪場や駅前交番等の公共施設については、関係機関との具体的な配置計画の調整を進めます。
- ・ 基本計画の策定：整備方針、詳細なゾーニング、事業手法の選定、概算事業費の算出、および財源計画を確定させる「基本計画」を策定します。
- ・ 国庫補助金の活用検討：都市再生整備計画等、国の補助スキームの活用に向けた関係機関との事前調整・準備を推進します。

②設計業務の着手と補助スキームの構築(令和9年度)

策定した基本計画に基づき、具現化に向けた設計および財源確保に向けた準備を進めます。

- ・ 設計業務の公募：基本設計業務の公募を実施し、最適な事業者を選定します。
- ・ 国庫補助金の申請：国に対し、社会資本整備総合交付金等の活用に向けた概算要望および本要望を行います。

③実施設計と施工体制の整備(令和10年度)

「大曲の花火」第100回記念大会の年を、次なるフェーズへの転換点として位置づけます。

- ・ 実施設計の推進：前年度の基本設計に基づき、工事着手に向けた詳細な実施設計を発注・策定します。
- ・ プロモーションの展開：「大曲の花火」第100回記念大会に合わせ、将来の駅前イメージの公開やイベントを通じた情報発信を行い、駅前整備への期待感を醸成します。

④本工事の着手と段階的な供用開始(令和11年度～)

スモールグリッド開発の利点を活かし、グリッド毎に段階的な開発を実施することで、早期の賑わい創出を図ります。

- ・ 本工事の着工：令和11年度よりグリッド単位での本工事を順次進め、着実な工程管理を行います。
- ・ エリアマネジメントの始動：最初のグリッドの完成に合わせ、維持管理やイベント企画を統合的に担う体制(エリアマネジメント組織)を本格稼働させます。

